

第 69 回 東部部会例会 ワークショップ

「世界と伍する日本の研究スタイルを考える」

*国際ビジネス研究学会関東部会との合同開催

研究者、大学院生、学生の国境越えた移動を背景とし、世界大学ランキング（QS ランキング、タイム誌による THE など）への注目が高まっている。世界（とくにアジア）の主要大学はこのランキングを高めるための具体的方策を矢継ぎ早に実行している。我が国においても文部科学省がランキングを高める政策的な方向性を示している。このランキングを高める有効な方策の一つが、論文数の量産と被引用数の獲得である。結果として主要な海外学術誌での論文発表が優先されていく。

しかし、この研究成果の説明責任と資源配分の最適化を目的とする「監査システム（audit system）」の導入に対しては、大なる副作用を懸念する声が高まっている（苅谷, 2017; 石川編, 2016）。研究成果に対する評価方法のグローバル標準化は、研究者間のグローバル競争を促す一方で、不毛な「知の序列化」を招き、研究の独創性や独自性の喪失につながる危険性をはらんでいる。欧米で開発されたシステム（たとえば、世界大学ランキングやジャーナルの査読基準）に無策に迎合することは慎むべきであろう。とはいえ、我が国における国際ビジネス研究、多国籍企業研究の未来を考えると、メジャーリーグに参画し、研究成果を出していくことに背を向けることはできない。

多国籍企業学会および国際ビジネス研究学会ではすでに 2014 年より、全国大会、部会を通じてこの問題を検討してきた（Asakawa, 2014）。そこで今回はこれまでの議論を踏まえ、会員の皆様と共に「日本の研究スタイル」についてさらに深く考えることを目的とし、ワークショップを開催する。参加者による侃々諤々の議論を通じて、我々が目指すべき方向性を探り、学会としての一定のコンセンサスを形成したい。本ワークショップはこれまでの一連の企画のひとつの終着点であると捉えている。

考えられる議論のテーマは以下のとおりである。

- ・ 日本の研究スタイル（研究環境、データへのアクセス性、人的資源、知識など）における独自性と優位性とは何か？
- ・ 日本の研究スタイルの独自性に基づいた海外への研究成果発信の方法
- ・ 日本の学会における支援システムのあり方（PDWS, 翻訳補助, 英文ジャーナル発行, 海外ジャーナルとの連携など）

中堅、若手研究者、大学院生、社会人院生はもちろんのこと、ベテラン研究者も含めた幅広い層の会員の皆様のご参加をお待ちしております。皆で議論しましょう。

参考文献

- Asakawa, K. (2014) “Distinctiveness of Japan’s IB Research: What Makes It So Unique?,” *JAPAN MNE Insights*, 1(1), pp.3-5.
- 苅谷剛彦 (2017) 『オックスフォードからの警鐘』中央公論新社。
- 小田部正明 (2018) 「アメリカの大学の専門分野の人気に変化」世界経済評論 2018 年 11・12 月号, 82-83 頁。
- 石川真由美編 (2016) 『世界大学ランキングと知の序列化: 大学評価と国際競争を問う』京都大学学術出版会。

プログラム (予定)

場所：早稲田大学 11 号館 704 教室

時間：14：30～17：30

司会 白井哲也 (日本大学)

1) 問題提起とワークショップの説明 (10 分) 白井哲也

2) 特別講演 (50 分)

浅川和宏 (慶應義塾大学)

「日本の研究スタイルの強みをどう活かして世界で戦うか？」

金熙珍 (東北大学)

「日本の研究スタイルの弱みをどう補って世界で対話するのか？」

3) 5～7 名程度の小グループでのディスカッション (60 分)

*参加者数に応じてグループディスカッションの形式は変更する可能性があります。

4) 全体でのディスカッションとまとめ (50 分)

5) 閉会のお言葉 新宅純二郎 (東京大学)

*終了後の両学会合同にて新年会を開催いたします